

マタイによる福音書19章16-22節 「真面目な人のつまずき」

1A 永遠の命

1B 長さでなく質

2B 良い行い

3B 欠けたところ

2A 良い方

1B 神のみの属性

2B 戒めにある命

3A 十の戒め

1B 人との関係

2B 神との関係

1C 完全

2C 貧しい人への施し

4A 世の悲しみ

本文

マタイによる福音書 19 章を開いてください、私たちの学びはマタイ 18 章まで来ましたが、午後には 19 章を読んでいきます。今朝は、16-22 節に注目したいと思います。「16 すると見よ、一人の人がイエスに近づいて来て言った。「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか。」17 イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方はおひとりです。いのちに入りたいと思うなら戒めを守りなさい。」18 彼は「どの戒めですか」と言った。そこでイエスは答えられた。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。19 父と母を敬え。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。」20 この青年はイエスに言った。「私はそれらすべてを守ってきました。何がまだ欠けているのでしょうか。」21 イエスは彼に言われた。「完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。」22 青年はこのことばを聞くと、悲しみながら立ち去った。多くの財産を持っていたからである。」

金持ちの青年の話です。おそらく、彼が、いろいろな聖書人物の中で最も、日本においては身近な人なのではないか？と思います。それは、簡単にいうと「真面目くん」ということです。

ユダヤ人信者の人で、日本にも訪れたことがある人と話したことがあります、日本にいらして「ああ、イスラエルと似ているかもしれない」と思ったそうです。イスラエル人も、イエス様を信じる

人はとても少ないということですが、どちらも「きちんとできてしまう」ということがあるでしょう。あんなに迫害を受けた民族なのに、復興して、先進国にまでなり、ロケットが何十発飛ばされても一人として死なず、また土地の半分が沙漠なのに、そこに広大な農地を持っているのです。生き残るために、あらゆる知恵と知識を駆使して努力しています。日本人もそうですね、世界に出ると分かるのですが、日本は世界一流の国の一つとしての評価を受けています。しっかりと出来るのです。「真面目にやっていけば、人は人として生きられる」という信念が貫かれています。けれども、それがかえって、信仰を持つのに妨げになっているんですね。それで、「真面目な人はつまずく」という題名を付けさせていただきました。

1A 永遠の命

1B 長さでなく質

この青年は、さきと、イエス様のところに近づいてきました。その質問が、「**永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをすればよいのでしょうか。**」というものです。彼がなぜ、そんな質問をしたかと言いますと、子供をご自分のところに受け入れている姿があったからです。他のユダヤ教の教師と明らかに違うそのまなざしと態度、言葉に魅かれたのだと思います。その前には人々が離婚を平気で行っている中で、イエス様は二人を引き離してはいけないと教えられました。彼には、永遠のいのちについて何かがあるのではないか？と思ったのです。つまり、彼にとって永遠の命とは、自分の命がずっと長く続くということではなく、生きているという意味が分かっていること、命の質のことを意味していました。

興味深いことに、日本における伝道で、アメリカとは違い、永遠の命について話すと、「結構です」という人が多いです。かの世にも命があるのですよと話すと、「この人生だけで十分です」という答えが返って来ることがあります。そうですね、人生で疲れてしまった人に対して、その人生が永続することを考えること自体が苦痛です。ですから、永遠のいのちと言う時は、単に永続する命という意味だけでなく、永遠に価値のある命と言ったらよいのでしょうか、永遠の神の持っている命と言ったらよいでしょう、そういった命なのです。

2B 良い行い

ところが、彼はその質のある命を、「**どんな良いことをすればよいのでしょうか**」と言って、何か良いことをすれば得られると思っていました。けれども、彼の人生が「良いことをしても、命が得られるわけではない」ということを物語っています。

良い行いということであれば、彼の品行方正は卓越しています。他のユダヤ人教師は、イエス様を試すためにやって来ていました。けれども、彼はこのようにしてイエス様に対して敬意を払っています。イエス様を、「先生」と呼んでいます。そして彼は、分別がありました、良く人を見ています。イエス様に何かがあるということを見抜いていました。そして、彼は他の福音書では、「指導者

(ルカ 18:18)」ともあります。会堂司だったのかもしれませんが。そして、また他の福音書では、「御前にひざまずいて」います(マルコ 10:17)。へりくだっていますね。そして彼は、後で十戒を守っているか尋ねられた時に、姦淫をしたこともないし、盗みもない、偽りの証言もしていません、両親も敬っています。ですから、彼は道徳面においても優れていました。ですから、彼は申し分ない人なのです、それでもやはり、「**どんな良いことをすればよいのでしょうか**」と言ってイエス様のところにやってきているのですから、何か足りない、欠けていると彼は分かっていたのです。

3B 欠けたところ

私たちの心のどこか奥底に、「自分がこれだけ、このことをできていれば、祝福されるはずなのに」という思いが来ないでしょうか？そして、何かにかき立てられていろいろ良いことを行っているとしていないでしょうか？そして私たちは、教会に来ることさえ良い行いのようにして来ていないでしょうか？「教会に来ていさえすれば、救いがある」というように。けれども、驚かせるかもしれませんが、他の道徳的に悪い行いと神の前ではさほど変わらないのです。なぜか？自分に、神にしか埋められない心の空洞と言いますか、虚しさを他のもので埋めようとしているからです。やればやるほど、自分が何か欠けていることに気付くのです。

実は、そういった意味で良い行いと、悪い行いというのは隣り合わせなのです。良い行いで知られている人は、実は影というか、闇の部分を持っています。悪い行いも同時に行っているか、すぐに墮落してしまう可能性があるからです。ソロモンが伝道者の書で書いているところに、それが如実に表れています。彼は知恵に満ちた王でした。あらゆることをしっかり知恵をもって行っていました。虚しかったのです。そして、調べて、探求し、知識を増し加えていきました。虚しかったのです。それで、こう言っています。「私は心の中で言った。『さあ、快樂を味わってみるがよい。楽しんで見るがよい。』しかし、これもまた、なんと空しいことか。(2:1)」彼は酒にあけくれ、敢えて愚かさを身に着けてみようと思いました。そう思いきや、今度は自分の邸宅を大改築して、事業を拡大しました。また金銀も集め、側女も手にいれました。それもまた虚しいと言っています。このように、良い行いによって質のある生活を送ろうと考えても、それを手に入れることができないのです。

2A 良い方

1B 神のみの属性

イエス様は、とても意味深なことを言われます。「**なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方はおひとりです。**」この青年は律法に詳しいはずですが、イエス様がここで意味しておられることは、理解したと思います。ギリシア語で「アガソス」という言葉ですが、「本質的な善」を表しています。そして、本質的な善というのは人に対して使わないのです。ユダヤ人たちは、「良い方」と言ったら、それが神を意味していました。良いものは神からしか来ません。ですから、イエス様が、「**なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。**」と尋ねられたのです。そして、「**良い方はおひとりです。**」つまり神しかいないのだ、と言っているのです。

この青年は、イエス様のところに来たのですが、本当の意味で来ていないと言っているかもしれません。先生と言って敬っていますが、人間の教師であるイエス様のところに来たのではないのでしょうか？けれども、イエス様は神から来られた方、神ご自身であります。そして、彼が良きものは神からしか来ないのだ、だから今、神のところに来るために真剣に考えようではないか？と問いかけておられるのです。あまりにも多くの方が、道徳的な人が、また信仰的に優れているように見えるような人が、神相手ではなく、むしろ人相手になっていることがあります。真面目であるということは、裏返すと自分に対して真剣、またはほかの人間に対して真剣なのです。けれども、信仰者は、自分に対しても、相手の人間に対しても、本質的なところで真剣であってはいけません。真剣に取り組むべき方は神なのです。英語でこんな風に、ある牧師が説明してくれました。”Don't take yourself seriously. Take GOD seriously.”自分のことを真面目に扱うな、神に真面目に取り組め、ということです。

2B 戒めにある命

けれども、良い行いで命を得ようとする人は、いつまで経っても命に至りません。そこにあるプライド、自尊心というのは頑丈に横たわっています。しかしイエス様はかえって、「わたしを信じなさい、そして命を得なさい。」と言われず、「では、戒めを行いなさい」と言われたのです。「いのちに入りたいと思うなら戒めを守りなさい。」と言われました。青年が誤って戒めを捉えていることを敢えて使って、彼の理解するレベルにまで降りて、このように言われています。確かに、申命記 6 章 3 節に、「あなたの神、主を恐れて、私が命じるすべての主の掟と命令を守るため、またあなたの日々が長くなるためである。」と教えられています。けれども、それはあくまでも主がその人を行いに問わず、愛し、選んでくださり、贖ってくださったからこそ、その愛の関係の中で教えに留まるのであり、それゆえに命が豊かにされるのであり、その逆ではありません。

3A 十の戒め

1B 人との関係

そして青年は、18 節で「どの戒めですか」と尋ねています。すかさずそう尋ねられるということは、彼は本当に戒めにいつも目を留めていたことが分かります。イエス様は、答えられています。「殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽りの証言をしてはならない。父と母を敬え。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。」十戒において、後半部分の戒めです。殺してはならない、姦淫してはならない、盗んではならない、偽りを言うてはならない、であります。その前に両親を敬えとも言われています。これらが十戒の後半部分です。そしてイエス様は、これらの戒めをすべてまとめると、他にレビ記に書かれています、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。」ということになります。

そして彼は、20 節、「私はそれらすべてを守ってきました。何がまだ欠けているのでしょうか。」と言っています。これは驚くべきことです。彼は、少なくとも意識の中ではこれらを全て守っていたの

でした。本当に真面目です。しかし、ここで注目してください、イエス様は他の人間との関係のほんの部分しか、聞いておられていないことです。イエス様は、彼が人を相手にして良いことを行っていることは知っておられました。それで、ここから入られたのです。けれども、もう一度、思い出しましょう、良いことというのは神にしかありません。善なる方は神のみです。神に出会うことなくして、良い行いをすることはできません。数多く世界には良い行いをしている人たちがいます。けれども、人が神に出会う時には、あまりにもとてつもない認識の格差が訪れます。人としては、良いように見えていても、その隠れた動機というものは奥の奥にしまわれており、そこにおいて自分を偽っています。しかし、その偽りのゆえに、自分を騙してしまっているがゆえに、命を本当の意味で得ることができていないのです。

2B 神との関係

まだ「何がまだ欠けているのでしょうか。」と青年は尋ねているので、イエス様はそのまま答えます。21節、「**完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を持つことになります。そのうえで、わたしに従って来なさい。**」

1C 完全

イエス様が、「**完全になりたいのなら**」と言われていました。これは何も、テストで百点を取るようなものではありません。永遠の命、神にあって満足している状態です。しかし彼にとっては、もういろいろなことをやりつくしたのだけれども、他にやり残していることはないですか？と、テストで百点を取りたいというような意味合いで受けとめていることでしょうか。多くの人が、人生自体が学校のようになっています。点数を取って、それで受け入れられるという生活パターンが身に着いています。けれども、完全になりたいのなら何をすることでしょうか？神の前にへりくだることです。

2C 貧しい人への施し

それで、イエス様が爆弾を落とされるのです。イエス様に弟子として従う時に使う言葉、「**そのうえで、わたしに従って来なさい。**」と言われていました。弟子たちに対して、「自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしに従いなさい。」と言われていましたが、その自分を捨てなさいというところに関わります。彼は、自分で全く気付かない、根本的なところを神によって、イエス様によって示されたのです。それが、「富を愛している」ということです。パリサイ派の中では、富は祝福のしるしであり、神の御国に入れるしるしでもあるとされていました。ですから、彼が金持ちであることは、むしろ周りからは歓迎されていました。しかし、分かっていたのです。彼は、十戒の初めの部分、「わたしのほかに、神々があってはならない」という戒めを守れていなかったことを。神のほかに、富が一つの神になっていたということ。そこに、自分の救いの確証があつて、それが切り崩される、自分がなくなるような、アイデンティティーがなくなっていくような気がしたと思います。しかし、イエス様は、「自分の命を失うものは、それを救う」と教えられました。救われるためには、失われなければいけないのです。

真面目な人、自分の行いを救いと安心の拠り所としている人は、自分の自分に対する評価と、神の評価の落差に愕然として、立ち上がれないほどになってしまいます。聖書には、その落差があまりにもすごい話がたくさん出てきます。イザヤは、エルサレムとユダの悪事を預言していたのですが、実際に主に出会ったら、「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の主である王をこの目で見たのだから。(6:5)」と言われました。そして、ラオディキアの教会に対してイエス様は、「黙 3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、足りないものは何もないと言っているが、実はみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸であることが分かっていない。」と言われており、自分が自分を見る目と、神が見ている目と、これだけ違うのだということを明らかにしておられます。

良い行いを積み上げようとも、そこには命がありません。命というのは、あくまでも砕かれた魂、へりくだった者が神の憐れみにすがって、その神の憐れみによってキリストの血によって清められたところの魂から、神の命が流れあふれるということなのです。しかし、良い行いによって命を得られると思っているところには、自分がますます見えなくなるという深刻な問題もあります。闇が深くなるのです。

4A 世の悲しみ

残念なことになりました。「22 青年はこのことばを聞くと、悲しみながら立ち去った。多くの財産を持っていたからである。」とあります。

悲しみには、二種類あります。それは、罪を悲しんで、悔い改め、救いに至らせるものと、ただ自分を愛しているので悲しんでいることがあります。「Ⅱコリ 7:10 神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」金持ちの青年がどちらで悲しんでいるかと言いますと、もちろん世の悲しみです。なぜわかるか？立ち去ったからです。

悔い改めとは、イエス様のところに来ることを意味します。その時に、自分の罪深い姿を悲しみ、それで神の憐れみを信じてイエス様のところに行くことによって、罪を赦され、恵みで満たしてください。けれども、悔い改めないのは、イエス様のところから離れているということです。いや、初めから実は、イエス様から実質は離れていたのに物理的に近くにいただけです。他の福音書においては、イエス様が彼をいつくしてんでいるとあります。他の群衆で悪霊につかれている人や、病の人に対していつくしまれたように、彼が富に縛られている姿を見て、いつくしんでおられたのです。状況はとても豊かで、道徳的なのですが、実は惨めで、貧しかったのです。自分が貧しくて、惨めなのだということ。これを認めることから福音は始まります。悔い改めてください、それは子供のようになることです。自分が何もできない、神さま、イエスさま、助けてくださいと祈るところから始めることです。